

「思想史研究者」と「文学研究者」との垣根越え——事後的な感懐——

高橋 文博

わたくしは、このたびのシンポジウムでコメントーターを勤めさせていただいたが、コメントーターの役割は、報告者と同じものではないはずである。コメントーターは、基本的には（時に報告者と同等に議論しあうといったことがあるにせよ）、報告者の報告について、その報告の中に含まれる新たな論点を引き出すことを促し、そのことにより、シンポジウムを有意義なものにするべく、コメントをするものであろう。その姿勢は、今回のシン

ポジウムの中でも明言したところである。そうであるとすれば、シンポジウムが終わった時点で、コメントーターの仕事も終わっているといつてよかろう。むしろ、三つの報告ならびに提言、その後のシンポジウムの内容

について思うところはあるが、それを述べる余裕はない。事後の感懐として、シンポジウム全体のありようについて述べることにする。

このたびのシンポジウムは題して、「越境する日本思想史——思想と文学の垣根越え」である。このところ、世上では、学問の「越境」流行りである。あるいは、異分野の複合、融合、総合、インター何々を目にすることは多い。

日本思想史研究は、もともと越境している。日本思想史学会は、四〇年も前から歴史学、政治学、宗教学、美術史学、日本史学、日本文学、仏教学、中国哲学、中国文学、倫理学等々さまざまな学問分野の立場からの日本

における思想・文化研究の会員の集まりであった。毎年の大会における研究発表は、多様な学問分野からするものである。だから、同じ時代のほぼ同じ分野について、全く異なる視角からの報告に接することも多い。これは、同学や同一分野の研究会とはまったく性格を異にしている。そうした研究会は、時に、「きょうだい」か「いとこ」の集まりであるかのように、同質的で自閉しているような場合があり、それは滑稽でさえある。日本思想史学会は異質な学問的背景をもつものが、それぞれの学問的立場によりつつ、議論しあう、開かれた学問的交流の場であるとわたくしは捉えていた。ただし、わたくしは、異なる学問的立場の「越境」が容易であるとまで考えているわけではない。

さて、そうであるとすると、このたびのシンポジウムのねらいは、日本思想史の越境ではなく、「思想と文学の垣根越え」にあったのである。この思想と文学との関係をどう考えるかということ自体がシンポジウムの重要な主題である。その主題をめぐる報告が、シンポジウムでなされたわけであり、また、本誌に、シンポジウムを踏まえて、改めて報告者からの論考が掲載されているのである。それらの内容に立ち入らない限りで、わたくしが、シンポジウムのねらいについて述べるとすれば、こ

のシンポジウムは、「思想史研究者と文学研究者との垣根越え」にあったということになる。

ところで、右に述べたように、日本思想史学会についてみても、思想史研究者という同質的な集団であるわけではない。そこで、「思想と文学の垣根越え」は、実態としては、日本文学の分野で思想の研究を進めている方々の積極的な参入を求める形で、日本思想史学会という場で議論しようという試みであったと考えることができる。そして、この試みは、日本思想史研究、日本思想史学会の「越境」的性格を一層深める成果を得られたと、わたくしはみている。

ここで改めて確認しておくべきことは、シンポジウムの主題が、思想と文学とのかかわりにあったことである。それは、思想とは何か、文学とは何か、両者の関係はいかなるものかという問いを含んでいる。わたくしは、こうした問いに直接答えようとするとつもりはないが、こうした問いが立てられていることの意味については一言したい。

それは、そもそも思想をそれぞれの学問的立場から研究するものに常に投げかけられる問題だからである。倫理学の立場から日本思想を研究するわたくしに即して言えば、倫理と何か、また、思想とは何か、倫理と思想と

---

の関係はいかなるものか、という問いが投げかけられている。思想研究が「越境」「垣根越え」するとは、自らの学問的立場へのそのような「かえりみ」を促している。分野を異にする研究者のシンポジウムは、しばしば不毛なすれ違いとともに、豊かな稔りを生むものであるが、加えて、自らの学問的営みへの「かえりみ」を促す貴重な場でもあるのである。今回のシンポジウムが、必ずしも常に意識化しているわけではない。「文学」「思想」あるいは「思想史」といった概念を改めて捉え直す機会となったであろう。そうであることを切に祈るものである。

(就実大学教授)